

【研究ノート】

## 中国科幻小说の諸相（4）

—— 世界SF大会における中国SF ——

山 本 範 子

## 研究ノート

## 中国科幻小说の諸相 (4)

### —— 世界SF大会における中国SF ——

山本 範子

## 目次

1. 2012年度世界SF大会における中国SF
2. 国際的な受賞と華僑たち
3. 中国におけるSF教育

#### 1. 2012年度世界SF大会における中国SF

2012年8月30日から9月3日まで、アメリカのシカゴにて世界SF大会が開催された。世界SF大会は1年に一度、世界各地からの立候補、選挙を経て選ばれた場所で行われる最大のSF祭典である。日本でも2007年に横浜で開催されている。

今年度は七回目のシカゴでの実施ということで、通称「Chicon7」(正式名称 THE 70 TH WORLD SCIENCE FICTION CONVENTION)と呼ばれ、盛大に執り行われた。

今回筆者が参加した理由は、中国から多くのSF関係者が参加するという情報と、彼らが複数の中国SF企画を実施するという事を事前に聞いたためである。

実際に行われた中国関係のプログラムは以下の通り。

- |       |       |                      |
|-------|-------|----------------------|
| 8月30日 | 13:30 | Feminist SF in China |
| 8月31日 | 10:00 | Reading: Emily Jiang |
|       | 13:30 | Autograph Session4   |
|       |       | Young Adult Trends   |

- |      |       |   |
|------|-------|---|
| 9月1日 | 15:00 | Kaffeeklatsch: Ken Liu  |
| 9月2日 | 09:00 | China: A New World<br>for Science                             |
|      | 10:30 | Chinas and Indiana<br>Fast Rising SF Market                   |
|      | 15:00 | China The Central<br>Kingdom: China's role in 21st Century SF |

以上である。日本のプログラムが三つであることに対して、中国のプログラムがいかに多いかが分かるかと思う。もちろんワールドコンベンションであるから、共通語は英語である。かつて日本で実施された時には、発表者が日本語で、英語の通訳がつく、もしくは逆に英語の発表者に対して日本語の通訳がつく、といったことがあったが、シカゴではそういったことはなく、すべての発表者が自ら英語を用いており、通訳は存在していなかった。

そういう意味では、英語教育に熱心な中国らしく、二十代の若手の参加が中心で、かつ彼らはすべてが流暢に英語を操り、発表時以外でも積極的に手をあげて自らの意見を英語で述べていた。

このことが、中国プログラムの多さの一因であることは間違いなさであろう。

また顕著だったのが参加者の年齢層で、中国からの参加者のみが二十代中心と非常に平均年齢が若かった。日本を含む欧米の一般的な参加者の平均年齢はかなり高く、三十代もしくは四十代を越えているのではないかとい



というのがテーマである。中国語では“女権主義科幻在中国”で、発表者は Jan Bogstad (司会者), 陈楸帆, 郝景芳, 吴岩, 江明 (EMILY JIANG)。所要時間は一時間半。実は筆者は飛行機の都合でこのプログラムには間に合わなかったため、呉岩教授のホームページによる報告を参考に、書かせていただく<sup>i</sup>。

この企画の中心はウイスコンシン大学の Jan Bogstad 女史が中心である。彼女は女性主義文学 (フェミニズム文学) を研究しており、かつ 90 年代に中国に留学していたことから、中国語にも堪能で、中国 SF におけるフェミニズムについてのテーマを提案したとのこと。

中国文学におけるフェミニズムというのは純文学ではよく語られているし、今年度のノーベル文学賞を受賞した莫言による、悲惨な田舎の女性像、或いはカフカに影響を受けた残雪による、突き放した冷たい視線で描かれた女性像などさまざまである。

一時期日本語訳されてブームになった『上海ベイビー』<sup>ii</sup>などは新しい女性像を描き、都市の若者文化の変化などを世界に発信した作品も出ている。

一方で、中国 SF における女性はどうのように描かれてきたのか。また描かれているのか。このような研究が中国 SF 界ではあまりなされていないように思われるため、非常に新鮮なテーマであると感じられた。

中国 SF におけるフェミニズムには三つの段階がある。一つ目は晩清時代から 70 年代末で、この時代には女性作家の参加はほとんどなく、70 - 80 年代においてフェミニズム作品はほぼ存在していなかったといえる。

1992 年になって虹影の『女子有行』は 2011 年という未来を舞台にした作品で、これが中国 SF における最初のフェミニズム文学であると考えられる<sup>iii</sup>。現代の女性作家、赵海虹の『伊俄卡斯达』は強烈なフェミニズム性を発揮しており、読者に強い印象を与え



る印象で、中国 SF の若さと勢いを感じさせられる結果となった。

それぞれのプログラムについて、内容や気づいたことを簡単に記していこう。

### (1) Feminist SF in China

中国におけるフェミニスト中国とはどのようなもので、どのような立場にあるのか、と

ている。

中国作家からは、中国と西欧との女性観が異なること、女性作家がフェミニズムを前面に押し出して作品を発表することの環境的な難しさなども指摘された。

中国 SF におけるフェミニズム文化はまだ未発達ではあるが、西欧との異なる文化背景からかんがみて、中国独自の努力、発展が必要であるということ、しかし女性の抱える問題は共通している部分も少なくないということなどが挙げられ、中国以外の西欧の女性から見た新しい問題提起の機会となったのはまちがいない。

## (2) Reading; Emily Jiang

これは作者（華僑）である江明が自分の作品を朗読する企画である。聞くところによると、英語だけではなく、母国語でも朗読可能とのことで、今後は日本人による日本語での朗読も待たれる。

## (3) Autograph Session4

サイン会。中国関係者も参加した模様<sup>iv</sup>。

## (4) Young Adult Trends

参加者は Bryce Moore（司会者）、Aurora Celeste, Gwenda Bond, Leigh Bardugo, Emily Jiang。ヤングアダルト小説市場における SF について、パラノーマル・ロマンスの部分から論じる<sup>v</sup>。

## (5) Kaffeeklatsch: Ken Liu

中国タイトルは「与刘宇昆（KEN LIU）面对面」。今、もっとも注目されている若手翻訳家で、SF 作家である Ken Liu のお茶会。中国名は刘宇昆で、子供の時にアメリカに移住した中国人である。

中国語 SF を英語に翻訳する腕前も高く評価されており、2012 年度の英語翻訳 SF・FT 大賞を受賞している。ほかの企画におい

ても、著名な欧米 SF 作家デイビッド・ブリンが、彼の名前を挙げて「彼は SF 界の国宝である」と評していたほどである。短編集が発表されており、英語、中国語訳が出ている。ただし、中国語訳においては、政治的な部分など何点かが省略、もしくは改正されているとのことで、オリジナル版の英語作品とは内容がやや異なるとのことである。

## (6) China: A New World for Science



中国タイトルは、「科幻在中国专扬」である。参加者は JANICE BOGSTAD（司会者）、北星、呉岩、江明である。驚いたことに会場には聴衆があふれ、席が足りなくて立ち見が出て、それでも入りきらなかったほどの人気であった。欧米の SF ファンが、いかに今、中国 SF に注目しているか、関心を強く持っているかがよく分かる状態であった。

呉岩教授が中国 SF の歴史を晩清から現代まで紹介し、特に刘慈欣による一大ベストセラー SF シリーズ『三体』を詳細に説明した。このシリーズは中国では SF ファンだけでなく、それまで SF を見下していた純文学層にまで広がり、一大ブームになっている。昨年あたりからは、純文学雑誌や新聞などで、作者や作品の特集、インタビューが行われ、現在ではさらに韓松、王晋康を加えた三大 SF 作家が純文学界にて注目されるようになっている。

また中国での SF の出版状況、売れ行きな

どについても言及された。中国産 SF だけでなく、欧米や日本などの SF 作品の翻訳も盛んであり、それらの影響を受けていること、さらにハリウッド映画の影響が強いことなども挙げられた。

最後に、中国 SF はもっと西欧 SF と密接にかかわるべきであり、作品だけではなく、こういった世界 SF 大会にも積極的に参加し、連携していくべきであるという宣言が行われて、質疑応答に入った。

#### (7) Chinas and Indiana Fast Rising SF Market



中国タイトルは“中国印度 - 正在增长的科幻市场”で、参加者は Janice Bogstad (司会者)、インド作家 Angeli Primlani、中国作家北星、アメリカ作家 David Brin、Emily Jiang (華僑、中国語が分かり、英語で執筆)である。まずインドにおける SF の出版状況についての説明があり、続いて中国での出版状況を説明、互いの SF 市場についての比較や問題点について討論された。

インドの SF は 19 世紀後半には既に登場しており、映画やアニメなどに顕著である。ロボットものなども多い。

中国 SF として挙げられたのは韓松の『紅色海洋』<sup>vi</sup>。この作品は未来の地球が海に沈み、ほとんどの陸地は残っておらず、人間は海の中で生活できるように改造される。陸に残らざるをえなかった人間と、未来を託された新たな人類である水棲人、その葛藤が描か

れる。またその後の水棲人社会も克明に描かれ、単なる SF としてだけではなく、痛烈な社会風刺や深い哲学的な洞察力などで突出し、中国国内だけでなく日本でも西欧でも高く評価されている。

インド、中国 SF における共通の問題としては、国際化である。英語で記されていないため、他国の読者を獲得することが難しく、そのため交流が少なくならざるをえない。今後は世界的な交流を目指したい、というまとめとなった。

#### (8) China The Central Kingdom: China's role in 21 st Century SF



中国タイトルは“中心之国：中国在 21 世纪科幻中的作用”で、参加者は Janice Bogstad (司会者)、陈楸帆、吴岩、江明、北星。それに途中から質疑応答で参加し、壇上に加わった夏筋である。さすがに特に新しい内容はなかったが、中心になったのはいわゆる「昔の世代」と「新しい世代」間の作家、作品の相違であった。古くは中国は科学普及を目的とした小説を推進したが、それは厳密にはストーリー性に欠け、今の我々の考える SF 小説とはかけ離れている。

また、中国 SF は中国大陸だけではなく、台湾や香港でもそれぞれに活動しており、連携をとっている。英語で参加できる中華 SF のホームページもあり、たえず新しい情報が更新され、書評なども掲載されている<sup>vii</sup>。さ



らに今回に備えて、『科幻世界』が中心となって、中国 SF を紹介するパンフレット（左図写真参照）も作成し、今大会では興味ある観衆に配布していたのも印象的である。

総じて、中国 SF はこれからの文学で、国内だけでなく国外でも注目されつつあること、今後はもっと大きく発展していくであろうことが予測されるものである。



このほか、華僑作家である Lily Yu (余丽莉) との食事会も開催された。筆者も中国人の中に 1 人だけ混ぜてもらって参加した。華僑ではあったが、Lily の中国語会話能力はまったく問題はなかった。ただし、漢字の読み書きが苦手とのこと。母国語は既に英語となっており、彼女の書く SF も英語である。

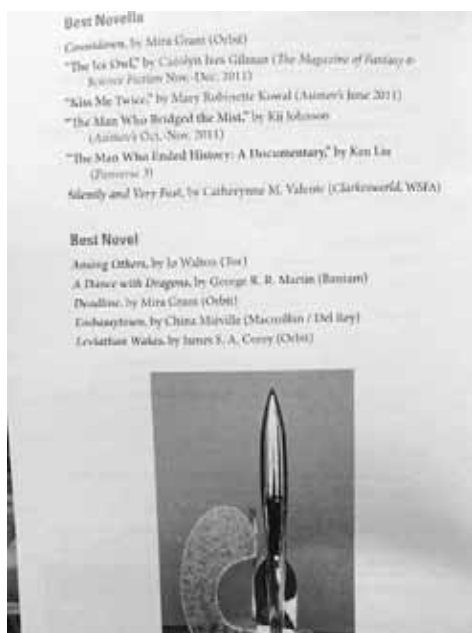
## 2. 国際的な受賞と華僑たち



今回参加した陳楸帆は先述した通り、短編『麗江的鱼儿』の英訳版で、2012年度のSF、FT 英文翻訳短編賞を受賞している。なお、この作品を英訳したのが、Ken Liu こと刘宇昆で、彼の翻訳技術や文学性などが高く評価されたものと考えられる。

また同じ賞の長編賞でも中国SFの英文訳が受賞しており、中国SFへの期待の高さ、評価をみてとることができよう。

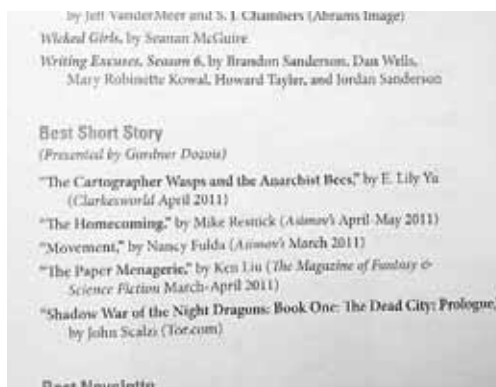
さらに世界SF大会ではヒューゴー賞はじめ幾つかの賞を一年に一度授与している。これは世界的な価値を持ち、言い換えれば一年に一度、最高のSF(とFT)を決める賞であるとも言うことができる。



HUGO AWARDは9月2日の午後8時より行われた。さまざまな賞があり、最終候補者は既に選ばれており、会場の前の席で準備している。司会者が軽妙洒落な会話を繰り広げながら、順に呼び上げていく趣向である。

この中で、新人賞では華僑の Lily Yu (余丽莉)が、Best Short Story (短編賞)では Ken Liu (刘宇昆)が 'The Paper Menagerie', で受賞した。なお短編賞の最終候補には Lily Yu の作品も選ばれていたし、Best Novelette でも Ken Liu が最終候補として選ばれていた。

ヒューゴー賞は世界中のSF作家にとっては夢のような賞であり、最高の榮譽ともいえるものである。小説にかんしては四種類しかないなかで、半分の二つの賞を華僑と華人(上述した通り、幼少期にアメリカに渡った中国人)が自ら英語で小説を記し、それが受賞したということは、これまでにない大きなことである。



なお、彼ら以前にも世界のSF界で活躍しているテッド・チャン (Ted Chiang, 姜峯楠) という華僑もいる。彼の作品は日本でも何冊も翻訳され好評をもって迎え入れられている。世界的なSF賞である、ヒューゴー賞、ネビュラ賞、ローカス賞など総なめにしており、華僑SFの第一人者である。

また、Derwin Mak (麦加玮) という編集者にも出会ったが、彼はアメリカにおける華僑SFのみのアンソロジー集を出版したとのことで、今後も華僑、華人SFにこだわって

いきたいとのことである。このような中華系 SF が編集・出版されるようになったこと自体、アメリカひいては英語圏 SF での興味と需要が高まっていることを示しているといえるのではないだろうか。

### 3. 中国における SF 教育



2012年3月に10日間北京に滞在し、北京師範大学の呉岩教授の授業見学、及び北京在住のSF関係者へのインタビューなどを行った。呉岩教授の専門は教育学で、特にSF教育に力を入れている。中国国家が正式に認めた大学院におけるSF専門分野教育も、現時点では呉岩教授のところのみである。

大学院の授業では、「子供へのSF教育」という授業があり、SF小説をどうやって子供の教育にいかすか、といったことが討論されていた。それに対する一つの解答が、呉岩教授が発表した『科幻应该怎样读』<sup>13)</sup>という一冊の本である。

これは「SFはどのように読むのか」といったタイトルで、子供向け教育書シリーズの一冊である。そのほかには、別の作者による童

話の読み方、エッセイの読み方など様々なものが出版されている。

内容としては、過去の世界中の名作SFから何作かを選んで紹介し（たとえば、ジュール・ヴェルヌなど）、SFの歴史と流れを解説。また中国SFの歴史も作品や作者と共に紹介している。

アイザック・アシモフなど一人一人に焦点をあてて、それぞれの作品の中からSFの概念や言葉を丹念に分かりやすく説明している。アシモフであればロボット三原則<sup>14)</sup>を中心とした観点や、哲学観などである。

作者によっては時間概念について説明したり、と非常に理解しやすいように構成され、SFに興味のある子供はもちろん、興味のない子供にも「読みたい」と思わせるような内容である。

中国の作家はもちろん劉慈欣で、彼の『三体』を中心に、幅広い内容をもとにした、新しい科学技術知識、民族復興などについて語っている。

大学院生たちはSF教育の授業で、どのようにSF小説を子供たちの授業に取り入れて科学への興味を持たせるか、またSFの後進をどうやって育てていくか、などについて学び実践している。

実践の一つとして、呉岩教授は近くの高校に出張講義に行き、多くの映像を見せながら、SFとはなにか、SFが持つ意味と可能性などを講演していた。

筆者も聴講させてもらったが、非常に豊富な例（特に映像）を見せて、理系の学生たちに科学技術だけではなく、それらをもとにした小説、文学という素材があること、それらが人々に何をもたらすのか、といったことについて考えさせる内容であった。

ほかに、大学院の授業では創作課があり、児童小説を全員が執筆、回覧してそれぞれで批評しあうというものがあった。児童小説であればジャンルは問わず、SFもあればFT



もあるし、純文学調のものもあった。この授業では、呉岩教授自身も SF 作家で批評家、研究者ではあるが、さらにほかの SF 作家に来てもらい、講演、学生作品の批評などを依頼していた。筆者が参観していた時にも複数の若手作家が来訪し、授業に協力していた。

シカゴの世界 SF 大会でも二つの SF 教育に関するプログラムがあり、呉岩教授もそれに参加し、多くを報告されている。筆者も日本における SF 小説の児童教育について質問されたが、中国やアメリカのような系統だった教育は確立されていないように感じた。事実、帰国後もいろいろと調べては見たのだが、授業として個人で SF に関する教育を行っている大学教員は複数いたものの、児童教育という分野ではなく、日本においてはこれからの課題の一つではないかと思われる。

以上、シカゴの世界 SF 大会を中心に報告を行ったが、今後は中国国内における SF のみならず、世界における中国 SF、特に華僑 SF についても追跡調査し、紹介をつづけていきたいと考えている次第である。

※本研究は科研費 (22652035) の助成を受けたものである。

- 
- i 以下、すべてのプログラムに筆者は参加したが、英語で聞き取りにくかった部分などもあり、呉岩教授のホームページも適宜参照させていただいたことを明記しておく。アドレスは以下の通り。[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_484a22af0102e2t8.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_484a22af0102e2t8.html)
  - ii 『上海ベイビィ』(衛慧/文春文庫)
  - iii 男女の性差における問題にも正面から言及している。
  - iv 同時刻に日本の企画があったため、筆者は不参加。
  - v 同時刻に日本の企画があったため、筆者は

不参加。中国 SF は中心ではない。Emily は華僑で英語が母語であり、中国語で SF を執筆しているわけではない。

- vi 筆者による部分訳が2007年『SF マガジン』9月号に「水棲人」として掲載。
- vii 世界华文 研究坊 world Chinese-language science fiction research <http://www.chinesescifi.org> 投稿はすべて英文である。
- viii 接力出版社、2012年2月出版。分類は児童文学である。
- ix ロボット三原則とはアシモフが1950年に作品中 (<ROBOT>) で作り上げた規則であり、以後 SF の基本となったものである。  
The Three Laws of Robotics are:

1. A robot may not injure a human being, or, through inaction, allow a human being to come to harm.

2. A robot must obey the orders given it by human beings except where such orders would conflict with the First Law.

3. A robot must protect its own existence as long as such protection does not conflict with the First or Second Law.

1. ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

2. ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければならない。ただし、与えられた命令が第1条に反する場合は、この限りではない。

3. ロボットは、前掲第1条および第2条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。